

野呂文学への誘い



野呂邦暢の略歴

本名 納所邦暢 昭和十二年（一九三七年）生
 昭和三十一年 諫早高校卒。
 昭和四十九年 第七十回芥川賞受賞。
 昭和五十五年五月七日 享年四十二歳で急逝。



第45回菖蒲忌（5月26日）にて
 野呂作品を朗読する高校生（上）
 文学碑への献花（下）

諫早通信 季刊

デジタル版27号
 （通巻79号）

2024年8月7日

野呂邦暢
 顕彰委員会発行

野呂さんが文学者仲間に出していた手紙は、「諫早通信」といわれていた。

義父山田かんへの思い

山田佳代



野呂邦暢さんの小説「愛についてのデッサン―佐古啓介の旅―」の中に、こんなくだりがある。「啓介が図書館へ出かけたのは、新聞を見るという目的の他に田村寛治という司書に会うためでもあった。（略）詩の同人誌「光芒」の主宰者である。（略）二階の整理課に田村は居た。（略）四十代の蒼白い肌をした男である。（詩人は目がきれいだ）といった父の言葉を思い出した。田村寛治もそうである。切れ長の目が澄んでいる。長崎へ来て初めてまともな人間に出会ったように思われた。」

この田村寛治は長崎県立長崎図書館の司書であり、同人誌「炮仗」を主宰していた詩人山田かん（本名山田寛）がモデルとなっている。野呂さんは「拙作において山田さんをモデルにさせていただいたわけですが、失礼の段はなかったでしょうか。」と山田宛に手紙を送っている。野呂さんのエッセイ『王国そして地図』に収録された「空から降ってきた手紙」では、野呂さんが物理学者嵯峨根遼吉の著書を調べてほしいと山田に依頼し、その日のうちに「原子爆弾の話」という資料があったことを山田は電話で回答している。

また、島原の宮崎康平さんが編集された『島原半島大字小字地名集覧』の編集後記には「関係の市町村役場の方々や県立図書館の山田氏ほか、各方面から多大の協力を得ました。」とある。

私は、諫早図書館の司書となり地域資料を担当することで、山田かんが野呂さんをはじめ作家の方々と繋がりが深かったことを知った。改めて優れた司書であり、知識教養の豊かさを備えた人だったのだと思っている。

私にとっては義父でもあった山田かん。一九九八年、夫（山田かんの次男）の転職で急遽長崎に移住した私は、知らない土地で前職の未練や東京での暮らしとのギャップに悶々としていた。そんな時、義父は「（長崎には）ぼちぼち慣れたらよかつさ。」と穏やかな優しい口調で話しかけてくれ、気持ちも楽になったことを覚えている。

私が次男の出産のため二歳の長男を連れて京都に里帰りする時、闘病生活で痩せ細り歩くこともやっとだった義父は、病院からの一時帰宅を許され諫早の自宅に戻っていた。初孫の長男をとて可愛がっていた義父は、いつものように玄関で長男に靴を履かせてくれた。別れ際、「佳代さん、お腹の子が生まれるまで僕は頑張るから。」と、笑顔で見送ってくれた。

（次頁に続く）

次男誕生の二週間後、義父は息をひきとった。

長男は思春期時代にひたすら詩を書き、次男は現在で歴史学を学んでいる。二人とも義父のDNAを引き継いでいるのかも知れない。

長崎で被爆し、命を燃やすように最期まで詩を書き続けた義父。その後、私も司書の仕事に就いた。そのことを義父はどう思っているのだろうか。生きていてくれたら、司書の仕事をたくさん質問して話したかった。

今、図書館で地域作家の作品に携われることに喜びを感じている。これからも、郷土の作品を少しでも多く保存し、紹介していきたい。

(市立諫早図書館司書)



〈第一回菅浦忌(昭和五十六年五月)で講演をする山田かん氏〉(於諫早文化会館)

「菅浦忌」の実施について尽力された山田氏は第十回菅浦忌にも文章を寄せている。

〈第十回菅浦忌に〉 山田かん

本年二月十七、十八日、JBBY(日本国際児童図書評議会)・子どもの本・諫早大会が開催された際、児童文学者M先生、W先生らのお話のなかに、母親の幼児への絵本の読み聞かせは二歳の頃から始めていなければ良い結果を得られないだろう、という趣旨の講演があったのを覚えております。

故作家野呂邦暢の御母堂納所アキノさんがもう十年も前に話しておられたことをこの時思い出しておりました。

「邦暢は絵本が大好きでした。わたしも家事の忙しいのを置いて邦暢の二歳の頃から膝の上に抱きあげては絵本を読んでもやりました。字も読めないのに内容をことばで覚えてしまうのです。覚えるともう次から次へと本を取り変えてはせがみ、それは際限もございませんでした。」人生のなかの朝明けの色と、予感される真昼の闇とを、オディロン・ルドンの絵に見るように鋭く描ききつた稀有の作家、野呂邦暢はこうして育てられてきたのです。

諫早という自然のなかに棲む地の精霊はさらにこの作家の、日本近代文学の伝統のなかで異端とも視える分析的描写と、細緻でリアルな表現者、文学者に成長を促しました。

そのような作家をわれわれは突然、一九八〇年五月七日に失いました。想いは尽きぬままに日は去り、野呂邦暢菅浦忌の十周年をここに迎えることになりました。(平成二年第十回菅浦忌に寄せた山田かん氏の言葉)

※当日の菅浦忌パンフに掲載

『隨筆コレクション2「小さな町にて」みずす書房』巻末の解題で浅尾節子氏は次のように記している。

野呂が小説を書くようになった気持ちの根本を決定したのは戦争と原爆であった。頭の中ではその二つをテーマとした大作の構想があり、一方、日々の執筆量は減るどころか増え続けていく。講演、対談、テレビ出演などの回数も多くなっている。一九七九年の夏あたりからは戦争体験の記録の紹介や書評を発表。さらには戦史、古代史、歴史小説へと、挑戦ともいえる多彩な活躍が続く。連載は月に四、五本、多い月は六、七本にもなっている。書きたいものが細胞のように増殖し続け、しかも力強く前進しようとする意志が感じられるのである。書けば書くほどに意欲が湧き出していつていたのではないだろうか。

野呂の死の三週間前、四月十七日、山田かん氏は野呂の家を訪ねている。

「その間(二人の談話中)も何回となく野呂氏への電話があり、そのたび氏は枚数と日時の確認をしたりメモをとったり……ひと通り途絶えた時、余りの事の多さに少しセーブしないと身体の方が持ちませんよと言うと、実は最近あまり調子がよくないんです。でもねえ、プロ意識を持ち出すわけじゃないんですが、仕事がある、与えられるということがハナだと思っているんですよ。そして書き続けることで自分の作家としての幅も広がっていくし、それがまた、日々に新たなありたいという僕の願いでもあるんです。がねえ」(虹)一九八〇年六月)。

「日々に新たなありたい——何でも書き、さまざまなものに挑戦し発見し続けようとしていた晩年であったと私はとらえたい。」

山田かん氏 略年譜

- 一九三〇 十月 長崎市に生まれる
- 一九三六 八月 母道子死去(二十六才)
- 一九四五 八月九日 旧制中学三年時 被爆
- 一九四八 七月 父好雄死去(四十七才)
- 新制高校三年生で中退、
- 恩師の紹介で県立長崎図書館に勤務。この頃から詩作を試みる
- 一九五二(五八) 文学サークル「芽だち」に参加
- 一九五四 一月 妹瑠子死去(二十一才)
- 三月 詩集「いのちの火」刊行
- 一九五八 第一回「現代詩新人賞」受賞
- 一九六一 一月 香月和子と結婚
- 一九六一 第一回「長崎県文藝賞」受賞

(以降刊行した詩集等)

- 一九六九 詩集「エッセイ集」『記憶の固執』
- 一九七一 詩集「ナガサキ・腐食する暦日の底で」
- 一九七五 詩集「アスファルトに仔猫の耳」
- 一九七九(二〇〇三) 個人詩誌「草土」
- 一九八一 詩集「予感される闇」
- 一九八四 エッセイ集「詩と詩人たち」
- 一九九〇 「山田かん詩集」
- 一九九一 県立図書館退職
- 一九九四(九八) ウェスレヤン短大非常勤講師
- 二〇〇一 エッセイ集「長崎原爆・論集」
- 二〇〇二 詩集「長興ながよ」
- 二〇〇二 詩集「長崎碇泊所にて」
- 二〇〇三 死去(七十二才)
- 二〇〇三 「西九州文学」に遺作詩「瀬戸夕暮駅」小説「須與の旅まに」掲載

(山田かん夫人 和子氏の編による「かんの詩(こだま)」年譜より)

*山田かん「アスファルトに仔猫の耳」炮眼社、一九七五年

野呂邦暢はこの書について次のような書評を残している

山田かん「アスファルトに仔猫の耳」について

詩をつくらなくても人間は気楽に生きてゆける。世の中に役立たずのものはごまんとあるけれど、あげるとすればまず一番に詩をもつてこなければならぬ。詩人は一体なにがめあてで深刻な顔をして詩などというものを書くのだろう。つまりない。小説もつまらないがすくなくともそれはあるていど長いから物語の面白さというものがある。暇つぶしにはもつてこいだ。美男美女の数奇な人生がありスパーマンの活躍があり、ページをめくるとき登場人物がさて次はどうなるかという胸はずむ期待がある。

それにくらべて詩ときたら七、八行か、長くても三、四十行だから簡略すぎて何のことかわかりはしない……というのが大部分の生活者のいつわらざる感想だろう。しかし、そういう人々も詩よりもっと短い俳句の前では立ちどまってわかつたような顔をするから興味深いことだ。私は詩を排撃

する人に対して詩を弁解するつもりはない。実際のところ詩の悪口をいっほど詩に対して関心を持たないのがほとんどである。

現代は万国博と能率の時代だから詩は無視され忘れられている。それでいいのである。詩はもてはやされなくて当たり前なのだ。けれども詩のそういう宿命を百も承知の上で黙々と詩を書き続ける人々は後を絶たない。この人たちは詩を売って生活しているのではない。詩で有名になろうとしていなくてもいい。むしろ目立つことを最もいやがるのが詩人である。私は日雇労働者として働きながら、タクシー運転手として、教師として、セールスマンや店員として日々の営みを果しながら詩作にいそしんでいる人々を知っている。額に汗して得た金で何年に一度かめいめいのささやかな詩作の成果を世に問う。一本にまとめるにしてもポーナスの一年分をあててもなお足りない額がある。なんのためにそれほど苦労して詩を書くのかと常人はいぶかるに違いない。金になりもしない詩集を出して地位が上がるわけじゃなし、決定的に風変わりだと思われのが関の山なのだ。そう思う人にキャスリン・レインという英国の詩人がこう語っている。「……私たちは宗教や国家への忠誠より

も、私たちが属している想像力の世界、神の国の都の方を強く意識しているのです。(略)この世界の特質は、私たちがそこでは物を所有し、物を他人からとりあげたり、他人にとりあげられたりするかわりに、お互いに物をわけあい、物を与え、共同で仕事をし、そしてそれによってめいめいが豊かにされるのです。

真実の平和が確立されるのは、(略)政治的に平和主義を説くことによつてではなく、想像力の産物である作品をお互いに楽しみ合いい、できるかぎりそういう作品を増すことによつてなのです。果たして詩人は風変わりなだけなのであろうか。山田かん氏は県立図書館の司書である。在職二十六年になる。これまで上梓された三冊の詩集は被爆体験を核としたものであった。そそかしい世間は被爆をうたう詩人を十把ひとからげに原爆詩人と呼ぶ。あたかも原爆が投下されなかつたらこの人たちが詩作することはなかつたらうとでもいうように。本書は後記によれば、「作品の展がりからもその素材のみに必ずしもこだわらない方針を樹てた」とある。素材とは被災経験を指している。原爆が投下されなかつたとしてもやはり山田氏は詩を書いていただろうと思わせるのに十分な一冊である。も

ともとその抒情の本質はナイーヴな感受性でかたちづくられてい。前記三冊の詩集においてページごとにふんだんに現れる炎と血と内臓と廃墟と死者たちのイメージに馴れたあとで、本書に収められた「しほから」という詩に出会うと私は正直のところほっとする。ぶ厚い全集に飽き／ふと 腹すいたと思う(略)鳥賊よ／海ふかく／群れなして翔びゆいた／なめらかな光体よ／幾千にきり刻まれ／味よい塩漬けのなかで／いまは／淡い桃色にくつたりとなつてい／深夜 ひや飯をくうおれだ。どここといつて変つたところはな

い詩である。だからこそこういう「変つたところのない」日常感覚の持ち主によつて書かれた被爆体験が値打ちを持つのだ。

「海を見にいぐII」と題した詩が私は好きである。バスがやつと坂道を登りつめたとき屋根の間に海が見えたというこれまたありふれたスケッチのようである。

それが何であつたのか／今ようやく気づいたのだ／わずか光つてこのころに入つて来たもの／それを捉えねばならぬ。……

それを捉えねばならぬ。

〔長崎新聞〕一九七五・二・五
(随筆)コレクション2「小さな町にて」みすず書房より

謙目を描いた野呂さんの
三〇世平、よきデッサン

②⑧

干潟

太陽はいつの間にか西に移動していた。風によって雲のさけ目がひろがると日光の束も太くなつた。男は息をのんだ。夕日が今、黄金色の立柱となつて葦原に立ちならび、壮大な宮殿がそびえたようであつた。日に照らされた枯葦はまぶしい黄と白に映えた。葦の茎は一本ずつ鮮明な影をおび、よくみがいた櫛の歯の鋭い輪郭をもつた。

雲が閉じると宮殿は消えた。枯葦はもと通り黒い棘の原にかへつた。男は海と対面した。干潮の海は痩せ、さつきより暗くなつた。時計を見るまでもなく時刻は知れた。潮の干満でそれは明らかだ。河口上流の町で育つた男は、川の水位によって時刻をはかつた。季節と月齢をあんじて時を推定することができた。灰を溶かしたようなたそがれが干潟をおおい始めた。物の輪郭がぼやけ干潟も鳥たちも一つの画面でかたちを喪失し、おたがいに浸蝕しあつた。そのような夕暮の光景は現在を忘れさせ、男を少年時代につれもどした。

野呂邦暢小説集成Ⅱ (文遊社)

「鳥たちの河口」420頁14行～421頁9行

一九七三年 三十六歳作

何を見たいか⑨ 文体の力

文が読み手を引き付ける。有明海の干潟の上に黄金色の立柱が葦原に立ち並び、ギリシャの神殿が立ち上がる。それもつかの間、消えると灰を溶かしたようなたそがれが干潟をおおい始め、(、は山下。以下同様)。干潟の海を知るものにとってこの対比は感動を誘う。

私は諫早にて画廊を続け五十七年になる。多くの画人とともに幾度もこの干潟の光景はみつづけている。野呂さんが諫早の干潟を守る会会長を務めていたときも野呂さんの自宅の垣根の向こうの漁業組合の近くで、「皆が幸福になつてほしいと思う。」と「チラシを配る時間があれば本を読んでいた。」と野呂さんのつぶやきををふと思ひ出してしまふ。灰を溶かしたようなたそがれが干潟をおおい始めた。野呂さんの三十六歳の時の文章だが今でもしっくりこころに豊かにしみわたつてくる。

大分出身の日本画家の巨匠高山辰雄先生に鑑定の件でアトリエの鎌倉に電話をかけたところ、画伯が生まれ、長崎の諫早から電話をしています。と名を名乗ると画伯は「九州はいいよね」としみじみと語られた。その故郷を思われる温かいおこころが私には生涯忘れられない。高山画伯も題材とされるのは大分の山や湖で、最晩年の自画像は湯布院の霧の中で杖に支えられ、たたずみ、しつかり大地に足を下ろし尊厳なまなざしでこちらを見られている。野呂さんも四十二歳の命ではなく長く生きておられたら、どんなに豊かに深遠な世界を、著わされていただろうかと夢を馳せる。その時点の野呂さんの目で今を見ることはこちらのこころがあれば見えるのかもしれない。残された文の行間に見える豊かな風光に無限のいのちの息づかい、喜びをこれからも味わっていきたい。

(文 編集委員 山下)

野呂の文体を支える力—干潟の海—諫早湾



現在の潮受け堤防の外側にあたる諫早市小長井町から臨む現在の諫早湾。雲間から差し込む朝陽

写真：三軌会 会員 濱辺耕作

「ケプラー^{*1}の法則

それは自然の数学的美というもの。

言いかえれば内側で自然がどのように働いているかを味わうことであり、僕らが目の辺りにしている自然現象というものが、実は原子同士の複雑な内面的活動の結果なのだと悟ることである。

そしてそれがどんなに劇的で、どんなに素晴らしいかを感じ取ることだ。」

天体物理学者ケプラーの法則についてR.P.ファインマン^{*2}は上のように述べている。

*1 *2共に物理学者（ファインマンはノーベル賞受賞）

野呂の文体はケプラーの法則を物差しとして語ることで文体の美しさについて語ることになるだろう。

それを育んだのが諫早の水、諫早の風、諫早の光、諫早の空気、諫早の鳥や干潟、諫早の草木すべての美が野呂の感性を刺激し、それがどんなに素晴らしいかを伝えてくれる。

そこに共通するのは「喜び」でありまた「清浄」「無垢」「愛」「希望」「勇気」「慈しみ」などにより感動であることを蘇らせてくれる。

いまま、野呂の好きだった水路の水門の前で白鷺が魚をついばんでいる姿を日々見られるのは、かけがえのない慰愛であり喜びとなっている。

(文 山下秀人)

ねばり

「空中戦に不向きな日本人」

野呂 邦暢

零戦のパイロットで、敵機約七十機を撃墜したことのあるエースが、

「日本人は空中戦に不向きなのではないか」

と語っている。毎年、夏に放送される終戦記念番組は、今年は「還らざる六機」というタイトルで、四国の海底から引きあげられた戦闘機「紫電改」にまつわる物語であった。私は昭和二十年夏、大村の近くに住んでいたから、この紫電改が飛ぶのをよく見ている。グラマンF6Fに外観が似ていた。

空中戦というのは、相手をおとすために後ろへまわりこむことである。おたがいに敵の尾部へつこうとして、空中で円を描くことになる。パイロットには地上で感じる何倍もの重力がかかる。血液が頭から脚の方の下がるため、目の前が暗くなり、失神することもある。もちろんパイロットは一人前になるまで空中戦の訓練をうけているからちつとやそつとのことではへこたれない。自分が苦しい時は敵も苦しいのである。歯をくいしばって、敵機を照準器の十字線にとらえようとす。

しかし、苦しさに耐えきれないパイロットの中にはいる。めまい、嘔き気、頭痛などにおそわれて「もういいや」という気になる。旋回をきりあげて、敵機をふりきろうとする。その瞬間、敵機の十二・七ミリが火を噴く。日本人はねばりが足りないのである。いいかたを変えれば、あきらめが早いということになるうか。零戦のエースが、空中戦には不向きと批判したのも、じつさいにラバウル基地その他の戦場で得た体験にもとづいている。

米食するからだろうか。いや、それはちがう。北ベトナムは米食国民だが、フランスやアメリカを向うにまわしてねばり強く戦った。米のせいではないようである。日本人には体質的にあきらめの早さがあるように感じられる。執念深いところが少いのだ。

たとえばボクシングの国際試合を見るといい。外国の選手はタイ人でもメキシコ人でもフィリッピン人でも、ノックアウトされる寸前までしぶとく戦う。がんばりかたが日本人とはちがう。どうかしたはずみにその一撃をうければこちらがグロッキーになるほどの力を残している。それにくらべると、日本選手が負ける場合のあつけなさといったら。

毎日、ビフテキを食べたくらいでは変りそうにない日本人の特色である。

今号に寄稿下さった市立諫早図書館司書山田佳代さんは、長崎の詩人、故山田かん氏を義父としておられます。山田かん氏は、長崎で被爆し、その三年後から長崎県立図書館司書を務める傍ら、七十二歳で亡くなるまで詩作を続けました。(略年譜参照) 野呂さんとも交流があり、「菖蒲忌」の開催にも尽力されました。野呂の、山田氏の詩集への書評や、「随筆コレクション」末尾、浅尾節子氏の解題も引用し、二人の関わりは勿論、野呂の表現者としての一面を、改めて見つけて頂けると思います。紙面の都合上、次号にもお二人についての資料を一部紹介する予定です。

(編集長 古賀順子)

※印刷版「諫早通信」一〇五十二号のアーカイブ閲覧が可能です。ご利用下さい。

編集長 古賀 順子

編集委員 平野 博 山下 秀人 柴田 元信

野呂邦暢顕彰委員会(諫早市芸術文化連盟内)

〒八五四-〇〇一四 諫早市東小路町一〇-二五

電話(〇九五七)三二一-〇三 FAX(〇九五七)三二一-六七

デジタルデータ制作 諫早印刷株

〒八五四-〇〇〇一 諫早市福田町二〇-二六

電話(〇九五七)三二一-三五〇 FAX(〇九五七)三二一-三五

季刊「諫早通信」は二月・五月・八月・十一月に配信します。

次号は十一月七日の予定です。